

注1 本遺跡については、既に『茅野市史』上巻に於いて概略を報告しており（文献4）、土壌出土の遺物についても、編年の位置についていくつかの論考がみられる（文献5・6）。

文献1 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1974 「本城遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市 その3—』

〃 2 白田 武正 1986 「第2章古代の集落」『茅野市史』上巻

〃 3 諏訪市教育委員会 1988 『一時坂—長野県諏訪市一時坂遺跡第1次発掘調査報告書—』

〃 4 茅野市教育委員会 1983 『高部遺跡—静香苑進入道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—』

〃 5 鋤柄 俊夫 1988 「信濃における平安時代後期以降の土器様相」『東国土器研究』1号

〃 6 原 明芳 1988 「長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2

## 第2節 狐塚遺跡の性格について

### 1 狐塚古墳と諏訪地方の古式古墳

フネ古墳の発見 諏訪地方の古墳の築造された年代については、藤森栄一<sup>(1)</sup>の業績がある。昭和14年代のその成果として、要約すると古墳最末期の7世紀に属する古墳がほとんどである。一部8世紀に降る古墳もあるとしている。

第二次大戦後、昭和34年、諏訪市大熊小字船地籍において、青銅鏡・鉄剣・鉄刀の発見があり、引きつづき調査が行なわれた。<sup>(2)</sup>その結果、主体部は割竹形木棺形式の、狭長な主体部二基並列の古墳である。副葬品は小形変形獣文鏡、玉類、青銅釧、蛇行剣、鉄剣、素環頭太刀、鉄刀、鉄鏃、鉄斧、ノミ（タガネ）、ヤリカンナ、鎌等である。土器類については全くみられず、のちの整理中ただ一片の無文須恵器小破片があっただけである。

墳形については主体部の周辺にやや盛土があったとみられる程度の高まりがある。地形測量では北方に突き出た丘陵上の、ほぼ中央に主体部が位置することが判明した。地形全体をみると、北方端は方形となり、東西側は急な斜面、南方は背後の赤石山脈に連なる。この地形図から、墳形について不明であると報告した。当時墳形については、方形になるのではないか、南西側に周溝がありはしないかと考えたが、それ以上の調査はできなかった。

フネ古墳の概要でしられるように、山上に築造された竪穴式で、粘土槨形式の二基並列する主体部、副葬品は従来、諏訪地方古墳にみられなかった古式副葬品。諏訪地方に通有的な副葬品とみられる馬具がない。水晶切子玉・金環もみられない。等々、従来の諏訪地方古墳観を変革させた古墳であった。

岡谷市湊糖塚古墳の再検討 糖塚古墳については、昭和10年両角守一<sup>(3)</sup>により紹介された。

フネ古墳の発見と調査により、上社周辺地域に古式古墳の偵索の目が向けられ、大熊片山古墳をさがしだした。一応の試掘を行ない、検討の結果、フネ古墳に類似する形態で、かつ出土品からみて、後続する古墳と考えた。そうになると、概出資料の再検討と、聞き込み調査を行なった。諏訪考古学研究所（藤森栄一主宰）では、まず概出資料で報告されている糖塚古墳。聞き込みで鉄剣・須恵器・土師器の出土のあった茅野市狐塚古墳。諏訪市神宮寺片山地籍。同市神宮寺入込

畑。同市大熊湯の上(片山)地籍。同市大熊新城地籍などが集約されてきた。いずれも上社前宮・本宮の鎮座する西山方面である。

糖塚古墳は、このような見方から両角論文の検討を行なった。その結果、地形は自然丘陵の突端で、丘陵上に小坂区鎮守御社宮司社があり、その下が主体部とみられる。昭和2年たまたまこの墳上で青銅鏡・勾玉・管玉・小玉・土師器破片が、少年により発見された。発見者の聞きとりによれば、出土品の下層に磐状の石があるという。両角の見解によれば、組合せ石石棺の存在を予見している。しかし、丘陵上において少年の遊び中発見された出土品というのは、比較的浅い土層から発見されたものとみるのが常識であろう。これらから、次のような結論が出された。

- 1 墳形は、丘陵端を利用しているが、上に御社宮司社があり、詳細は不明確である。
- 2 内部主体は、石室の可能性は少なく、竪穴式の無石槨墳とみられる。
- 3 青銅鏡は仿製の変形六獣鏡とみられ、諏訪地方としては稀少例で、フネ古墳の副葬青銅鏡に前後し、7世紀には降下しないだろう。
- 4 勾玉は、後期古墳に副葬されている「コ」の字形というより「C」字形に近く、古墳後期には降らない勾玉とみられる。

以上の見解から、糖塚古墳はフネ古墳に類似する。そして後続する時期の古墳であろうと考察した。

戸沢充則氏は、岡谷市史のなかで、糖塚古墳の編年的位置を、フネ古墳(五世紀後半としている)<sup>(4)</sup>につぐ古墳で、6世紀前半としている。

片山古墳の発見と調査 昭和31年頃、諏訪市大熊湯の上(片山ともいう)の畑で、鉄刀・勾玉を採集した話を聞き、フネ古墳に近い丘陵上であることから、採集者の後藤孔氏を訪ねて詳細を聞いた。

出土品を検討すると、鉄剣・鉄刀・鉄鏃の破片、管玉・小玉などで、地主が勾玉を採集しているという。これらの出土品からフネ古墳に類似する古墳であると考えた。

昭和43年秋、同一地主の畑の西柵より約7m東側にて、鉄刀2本、鉄剣1、鉄鏃2、勾玉1個が発見された。後藤が現地に行き、採集すると、鉄刀1本、青銅鏡1枚、管玉1個を得た。したがって此处にも柵の存在を認め、発掘調査を行なった。

発掘調査は昭和44年3月実施。<sup>(5)</sup>東柵部分の様相は、表土下約60cmで、黒土層中にローム土を混じった硬い水平面がある。この上に約1cmの木炭粉末層がある。この木炭粉末層の規模は、幅約3.5m、長さ南北約7mで、隅丸長方形とみられる。この木炭床のはほぼ中央に幅1.0m、長さ約2.3mの木炭のない部分があり、ここが棺床部分とみられた。周辺から鉄鏃3本と管玉1個の発見があった。木炭床の下層は黒土層となり、ローム層までは約1.5mの深さであった。

西柵の南西方向に石積が発見され、東柵の南方にまで続き、それは両柵の南西外側に葺石のあることが確認できた。葺石の並び方は円又は隅丸方形のように観察されたが、大雪と土の排除困難のため、全体観は把握できなかった。

昭和57年、片山古墳上に市上水道貯水タンク建設に伴う、緊急発掘調査が実施された。<sup>(6)</sup> 概要は主体部はすでに発掘、耕作で出土品はみられなかった。墳丘直径約24m、葦石は南から東側に半円形に、周湟底から約1mみられた。墳丘頂部の高さは、葦石上辺から約30cmで、ほとんど平坦であった。東西両槨は、ほとんど露出した状況であったとみられる。

副葬品の出土は数回にわたり、しかも耕作中の器物もあり、鉄剣と鉄刀については東西槨に分類しがたい。東槨出土副葬品は、鉄剣・鉄刀・鉄鏃5本・青銅鏡・メノ勾玉・管玉。西槨は鉄剣・鉄刀・鉄鏃・ヒスイ勾玉・管玉・ガラス小玉・土製紡錘車である。

青銅鏡は小形無文で三圈の凹文がある。鉄剣は短剣と長剣がある。鹿角柄をつけたものもある。鉄刀は平棟平造脹切先で、いずれも内湾する。全長92cmの大刀もある。鉄鏃は両槨の出土とも、両丸造腸挟柳葉式である。

古墳に伴うとみられる土師器・須恵器は、明確に判らない。周湟内南方で発見された土師器甕の時期は未定である。

主体部出土の鉄剣・鉄刀からして、フネ古墳に類似する。鉄鏃の新しい形式の出現は、一時坂古墳と比較し、相対的に古式とみられる。これらのことから、消極的な資料検討となるが、フネ古墳と一時坂古墳の間に位置する古墳と考察している。

本城遺跡周溝墓・古墳 <sup>(7)</sup> 諏訪市湖南本城遺跡は昭和49年に発掘調査が行なわれ、この際2基の周溝墓と2基の古墳が発見された。遺跡立地は湖盆を見下せる丘陵上にあつて、弥生時代から古墳時代にかけて小規模ながら集落が続いている。

周溝墓は方形と円形周溝墓で、周溝規模は同程度であり、主体部土壌には副葬品はなかった。周溝内出土品から両周溝墓とも五領期と報告されている。

一方、1号古墳は円形の周湟をめぐらし、周湟内のローム層上に、土師器高坏を器台のようにして、坏、埴等をのせて配列していた。主体部は黒土層中であつて墳の形は確認できなかったものの、直刀、勾玉、鉄鏃の配列がみられ、木棺直葬形式の主体部と考察された。1号古墳の時期は、周湟内の土師器から、5世紀末（和泉Ⅱ式相当）の時期を考えている。2号古墳の周湟は円形で1号古墳周湟とほぼ同程度。周湟内から古式須恵器甕が出土した。主体部は不明である。2号古墳の時期は須恵器甕を、須恵器第1型式として報告されたので、5世紀末から6世紀に相当しよう。

本城遺跡の周溝墓と古墳の関係は、直にいえないが、周溝墓が古墳時代まで築造されており、時間的には降るが1号墳・2号墳が築造されてくる。しかし本城周溝墓の築造される時期には、フネ古墳の築造、あるいは県内古式古墳の松本市弘法山古墳（4世紀後半）等の築造がみられることから、周溝墓と初期古墳の同時築造という時期のあつたことは明らかである。<sup>(8)</sup>

1号古墳の周湟内にみられる土師器の配列による祭祀形態の発見は、その後、諏訪市元町一時坂古墳においても発見された。筆者は本城1号・2号墳を、周溝墓の範疇でとらえようと考えたことがある。今は取下げ古墳とし、周湟内祭祀の一つのパターンとして取上げるものである。

一時坂古墳と周湟内祭祀<sup>(9)</sup> 諏訪市元町の福沢川北岸の舌状台地先端に築造された古墳である。一墳多葬形式といえる古墳で、古墳の直径約14m。墳頂上は約13×10mの広さで、そこに6槨、7棺の主体部の埋葬を考察した。副葬品は鉄剣2本、鉄刀（内湾）8本、鉄鏃（腸挟柳葉形式）143本。刀子14本。玉類（勾玉3個、管玉15個、ガラス小玉186個）がある。

墳丘の築造は丘尾を切断した形で、山（東）側に深い周湟を掘り、墳丘山（東）側に葺石を貼っている。周湟は広い部分で上縁約5m、深さ約1.20mあり、丘陵先端を利用した粗放的な墳形で、隅丸方形とも、楕円形ともみえる。

出土遺物では、周湟底に3群の完形土器をセットで配列している。また墳丘上西部と周湟東側上部にも2群の土器集中が認められ、土器配列が想定された。このことは本古墳では、土師器・須恵器が副葬品に使用せず、埋葬時に行なわれた墓前祭と考えられる。

主体部は県下古式古墳の主体部の平均値を準用し、鉄剣・鉄刀・鉄鏃等をグルーピングし、棺と推定した。刀・剣・鉄鏃の出土した方位から、南北方向に置かれた物8本。東西方向は2本となる。また出土レベルをみると、約10cmの差があり、2群に分けられる。

これらの調査結果から、墳丘規模はフネ古墳、片山古墳と同規模の大きさである。墳形は整った形を意識せず、丘尾切断利用で、正円ではない。葺石の築造も山側に貼り、周湟も山側に半円に掘るのは、片山古墳に類似している。主体部は木棺直葬とみられ、フネ・片山両古墳の粘土槨形式、本城1・2号古墳の木棺直葬形式に近いものである。副葬品はフネ古墳を例外に、片山・本城1・2号、清水窪古墳例と同様、鉄剣・鉄刀・鉄鏃・玉がセットになり、1棺あたりの数量は少ない。

時間的には、周湟内出土土器類から5世紀後半ないし6世紀初頭と考えられる。

一時坂古墳で注目されるのは周湟内における土器類の配列で、すでに発掘報告された本城1号古墳の、周湟内における土器類の整然たる配列の墓前祭祀が、一過性のものでなく、当地方古式古墳に実施された墓前祭式の一つであることを証明したのである。

狐塚古墳の墓前祭のあり方 狐塚古墳で2基の古墳の発見がある。1号古墳は、ほぼ全面発掘を行なった。その結果は前項に詳細に述べられている。主体部は耕作による攪乱で不明であったが、黒土層中に埋設された主体部とみられる。副葬品とみられる器物は、勾玉と鉄剣破片、鉄鏃・刀子破片が僅かに発見された。墳形は北西に延びる尾根の中段の頂部に、自然地形を利用し、山側（東南）に周湟がローム層まで掘られている。墳丘は南側で地山まで削り出し、地形の低くなる北方は削り出したロームを盛土して、墳丘を形成している。したがって墳丘は正円形にはならず、12×19mの大きさである。

墳頂部には土器類はみられなかった。土器は南側の周湟内から出土した。出土状況は周湟内にある程度土砂の埋没した時点で、墳丘斜面から底部にかけ、ことごとく細かく破碎された状況で、散布されていた。

散布された状況としても、高坏を主に、埴、埴があるまとまりをして重なり合って発見されて

いる。高坏Eについては、新しいタイプの土器とされ、1号・2号古墳中でもっとも後出する土器であるが、1号古墳周湊中より出土している。このことはある程度の時間幅をもって、周湊内における祭祀の行なわれたことを証するものだろう。それにしても、1号古墳の周湊内における墓前祭のあり方は、本城1号古墳・一時坂古墳にみられる、完形の高坏を器台に、その上に甕を中心に埴・坏など並べ、食物供饌を行なったあり方とはまったく異なる祭祀方法といえよう。

周湊内にある程度土砂の堆積してのち、土器を破碎して散布しているが、古墳築造時より、時間的に経過した時点で周湊内祭祀が行なわれたとみなければならない。

2号古墳は、1号古墳北側に位置し、周湊中に土器群が存在したとみられる。出土土器類は、1点の中型の須恵器甕のほかは、土師器の高坏・埴・埴・坏等である。出土状況から完形品で周湊内にあったものとみられ、となると、完形土器の周湊内配列祭祀の可能性が強い。

狐塚古墳は、同型式土器内のうちで、1号古墳から2号古墳へという時間差が考えられるとしている。両古墳とも主体部は不明であったが、かつて鉄剣・鉄刀が耕作で発見されている。いずれかの古墳主体部に伴うものだと考えられる。

二形態の古墳祭祀 諏訪地方古墳第Ⅰ期のフネ古墳型古墳として把握される古墳のパターンをあげたことがある。<sup>(10)</sup>ここでそれを補足した。

- (1) 丘陵末端又は丘陵上を利用し、丘尾切断形が多い。
- (2) 墳丘の山側に周湊を掘り、山側に葺石を有する古墳もある。
- (3) 主体部は墳丘上図に、粘土槨又は木棺直葬形式で施設される。
- (4) 副葬品は鉄剣、内湾する鉄刀、尖根形式の鉄鏃、勾玉・ガラス小玉である。
- (5) 周湊内を主にした墓前祭祀が行なわれるが、完形土器を整然と並べる方式と、土器を細かく破碎する方式がある。

フネ古墳型古墳として類型化した古墳は、<sup>(11)</sup>諏訪地方の第Ⅰ期古墳である。その形態からみて、周溝墓の系譜を引く墓制であると見解をのべた。例えば主体部の方位の傾向をみると、南信濃の周溝墓の大勢は西北である。そのなかで5世紀代に入る本城遺跡の周溝墓は北になってくる。一方竪穴式系古墳の主体部方位をみると、フネ古墳の二基の主体部は北東。片山古墳は北北西。一時坂古墳の主体部の多くは、北になっている。当地方の横穴式石室古墳の石室方位は、ほとんど北になるが、<sup>(12)</sup>竪穴式系古墳も、時代が降ると北方位になる傾向がみられる。この事もフネ古墳型古墳のなかで一つの傾向として見なければならない。

さらに狐塚古墳の調査で確認した、周湊内における墓前祭祀のあり方は、1号古墳にみられる土器の破碎、散布状のあり方と、2号古墳にみられる、完形土器の配列された祭祀のあり方、という二形態の方式の把握である。

5世紀末から6世紀初めにかけての土師器を破碎し、散布するという方式の祭祀は、古墳築造時より時間が経過してから行なわれており、新しい知見では、フネ古墳の試掘調査において、未

検討ながら、同一例と考えられる資料が得られた。一方の周湍内に整然と並べられる方式は、前述したように、本城1号古墳・一時坂古墳にみられるものである。

いま、同一土器形式内とみられる、5世紀代後半において、二つの墓前祭祀の形態がある事が明らかになった。これがいかなる政治的背景をもつものか、また時間差を持つのか、今後研究を要する問題を提出したのである。

諏訪市清水窪古墳 昭和39年住宅工事中に、鉄刀と鉄鍬の発見があった。<sup>(13)</sup>

立地は西方に伸る小丘陵上である。主体部は浅い層と、黒土層中に埋設されていたらしく、不明であった。

出土品の鉄刀は、内弯する平棟平造。鉄鍬は腸袂柳葉形式で、平丸造であった。

古墳立地、副葬品とみられる鉄刀、鉄鍬の出土状況からして、フネ古墳型古墳の範疇に入る古墳であることは確実である。

フネ古墳型古墳の発見が、いわゆる上社所在地の西山に続いたが、一時坂古墳の発見、そして手長丘古墳時代祭祀遺跡、清水窪古墳の確認と、湖盆東縁に分布することが判ってきた。今後この地域に発見される可能性があるものとみられる。<sup>(14)</sup>

諏訪地方の第Ⅰ期古墳 フネ古墳型古墳の発見、発掘調査が増加し、資料の集積ができつつある。資料の整理分類をなし、第Ⅰ期古墳の編年の編成、分布圏とその築造の背後集団の研究が求められる所である。

フネ古墳の被葬者がすでに、立地、副葬品から上社関係の人物<sup>(15)</sup>と想定する考え方もある。少なくとも、横穴式石室古墳の築造以前の、特殊な葬法として、周溝墓の系譜を引きつぐ古墳であることは確実である。

つまり、山上に築造される竪穴系木棺直葬墓と、山麓・台地に築造される横穴式石室古墳という、墓制の一大転換があったことは事実である。その事実が在地豪族守矢氏と、新来の支配者の交替の、神話伝承と反影したものではなかろうかと述べたことがある。<sup>(16)</sup>さらに進んで、古諏訪(上伊那を含む)<sup>(17)</sup>における、祭政的な統一をなした司祭者の人物であろうとも述べた。

フネ古墳の発見、そしてその系譜につらなる第Ⅰ期古墳の集積は、古諏訪地上の古代史上、上社発生の問題を含む重要な資料といえる。今後一層、Ⅰ期古墳の実態を解明することと、発掘においても注意すべき古墳である。

資料の集った第Ⅰ期古墳における編年案について試案をのべたことがある。<sup>(18)</sup>

フネ古墳—片山古墳—狐塚古墳—糖塚古墳としたもので、当時資料分析は弱かった。

今日の考え方は、資料としての土師器・須恵器の時期は、狐塚古墳・本城1号墳・一時坂古墳とも、5世紀末(和泉Ⅱ式期)の土器とされている。青銅鏡についてはフネ古墳・糖塚古墳・片山古墳の三例であり、この順に考えられる。鉄刀はいづれも内弯する形態であるが次第に直刀に近ずくと考え、フネ古墳・片山古墳・本城1号墳と一時坂古墳の順が考えられる。鉄鍬は片山古墳出土の腸袂柳葉形式を指標にして、フネ古墳・片山古墳・一時坂と清水窪古墳の相対的時間幅

を考えたい。

あと問題は周湍内祭祀のあり方、土器の破碎散布の仕方と、高坏を器台に整然と配列される仕方の意味についてである。時間差による祭祀のあり方なのか、被葬者あるいは背後集団の墓前祭祀のあり方の差であるか、今後の研究にまちたい。

狐塚古墳周湍内の土坑 古墳の周湍内に土坑の伴う例が確認された。1号古墳の南西部コーナー底部に作られたもので、比較的大形の土坑である。長軸方向は東北東である。

周溝墓と古墳周湍内に作られた土坑については、注目して取りあげたことがある<sup>(19)</sup>。その性格はまだ充分解明できない。本体の被葬者に系譜のつらなる人物の墓、動物供儀、供献品を埋めた墳など考えたが、証明出来る出土品はみられない。本土坑には炭化材、炭化物の混入が報告されており、今後の同例の資料をまっけて論考したい。ただ考えの中には、最近保存整備のため発掘調査された、森將軍塚古墳（4世紀末とされる）において、前方後円墳の葺石下方に、数多くの組合せ式石棺墓、埴輪棺墓の発見がある<sup>(20)</sup>。その性格はまた充分に解明されていないが、前方後円墳被葬者の系譜につらなる人々の墓、という考え方に魅力をもつものである。森將軍塚古墳例をあげてみたが、参考にして、今後の研究にまつべき資料である。

## 2 その他の問題

平安時代の土坑墓についてはここでは述べる余裕がない。吉田川西遺跡例と類似するとみられるが、狐塚例の方が副葬品の質、量が劣るようである。しかし当地方としては豪華な副葬品であることは注目されることである。

狐塚古墳の所在地は「みねのたたえ峰 湛」と呼ばれる所で、中世文書のなかに「峰湛神主」の名があり、湛神事の行なわれた場所で、現在古木である犬桜の樹がある。峰湛には古い道が通じていて、神使殿（おこうどの）の一行が、廻湛神事のさいここを通過して前宮に帰着するなど、古代・中世の諏訪神社上社神事に欠くことの出来ない場所であった。また東の扇状地には大祝の神殿館があり、また前宮社もある。西側の下馬沢川扇状地は、守矢神長邸の外、五官祝の居住地であり、遺跡としても、縄文、平安時代集落址である。さらに上社神事に欠くことの出来ない磯並社と、巨石の小袋石もある地帯である。この両扇状地を区切る丘陵上に狐塚古墳、平安土坑墓が作られているが、大祝・守矢神長等、諏訪神社の神官と深い関係にある墓域ということができよう。

狐塚、峰の湛周辺は、その立地・地形からみて、今後、第Ⅰ期古墳、平安期の土坑墓の発見される可能性が高い。平安墓はさておき、フネ古墳を最古として、横穴式石室古墳出現（6世紀前半）までの、いわゆる第Ⅰ期古墳、フネ古墳型古墳の数が少ないように思う。したがって、この地帯と、フネ古墳・片山古墳の所在する。上社本宮西側丘陵上に発見される可能性が強い。

註1 藤森栄一 「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」考古学10—1 1939

” 2 藤森栄一・宮坂光昭「諏訪上社フネ古墳」考古学集刊3—1 1965

” 3 両角守一「諏訪群湊村糖塚発見の六獣鏡」信濃4—7 1935

” 4 戸沢充則『岡谷市史』上巻。岡谷市 1973

- " 5 藤森・宮坂他「諏訪市大熊片山古墳」長野県考古学会誌 7 1969
- " 6 宮坂光昭「諏訪市一時坂古墳」日本考古学協会49回発表要旨 1983  
宮坂、高見俊樹、小林深志「一時坂古墳」長野県史考古資料編南信 1983  
高見俊樹「一時坂遺跡」長野県埋文ニュース 2・3号 1983
- " 7 県教育委員会「本城遺跡」『中央道埋文報告、諏訪市その3』 1975
- " 8 宮坂光昭「方形周溝墓の研究と現状」中部高地の考古学 1 1978
- " 9 諏訪市教育委員会「一時坂」 1988
- " 10 宮坂光昭「古墳時代の茅野」『茅野市史』上巻 1986
- " 11 註10に同
- " 12 註10に同
- " 13 宮坂光昭「周溝墓と出現期古墳」『一時坂』諏訪市教育委員会 1988
- " 14 宮坂光昭「清水窪古墳出土の鉄刀と鉄鏃」諏訪市史紀要 2号 1990
- " 15 林茂樹「手長丘遺跡」県史考古資料編 1983
- " 16 藤森・註 5
- " 17 宮坂光昭「古墳の変遷からみた古代族の動向」『日本原初考』 2 1977
- " 18 註10に同
- " 19 宮坂光昭「諏訪市豊田小丸山古墳について」県考古学会誌21号 1975
- " 20 宮坂光昭「一時坂古墳と周溝墓に伴う土壙について」註13に同
- " 21 更埴市教育委員会「森將軍塚」 1983～1987
- " 22 原明芳他『吉田川西遺跡』(財長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3 1989